

# 謝 辞

白 石 四 郎

今般、政経論叢で私の古稀記念論文集を出して頂けることになりまことに感謝にたえぬところであり、関係各位に心から御礼申上げる次第であります。古稀記念とは定年退職に対するはなむけの意味で、長期にわたって在職した者に向けられるものなので、長期にわたり在職させて下さった職場の皆様にも御礼申上げる。もちろん、感謝の対象となる方々には物故された方のほうが多く、改めて回顧すると政経学部を支えてこられた諸先生方や、私を指導して下さった諸先生、同僚の方々に先づ御礼の意を表します。後輩の方々にも色々と御世話になり、これからも大学の維持、発展のために努力されることを思うと感謝と御願いの意をあわせて表明します。大学の発展は日本の発展や人類の発展に絶対必要なことですので本当に宜しく御願ひしたいと思います。

顧りみますと学生時代を含めねば五十年を越える明大生活であり、その間はまさに日本にとっての疾風怒濤の時代でありました。したがって、私自身の性格にも左右されるのでありましようが、ほとんど心の休まる時代というものがありませんでした。若い時は1930年代の大不況期であり、1940年代は戦争と敗戦の時代、いくらか復興して来れば、東西対立が日本に持ち込まれて、人間関係などの妙な対立の時代が続きました。経済が発展すれば、そのマイナス面だけを強調する人々もおり、また我利我利亡者的活動にも恐れ入っております。大学紛争も東大の安田講堂事件やカルチャータン騒動のような出来事をのこしながら、その意味の歴史的解明に努める

人は少なく、もっぱら自己弁護や判断力の不足が目につきます。日本が混乱すればそれをよろこぶ者が世界のいたるところにいることを忘れてはいけません。1970年代にはニクソン・ショック、オイル・ショックがあり、日本の高度成長も終わりました。二度にわたる石油危機を経過した後の1980年代には途上国の債務危機もありましたが、何んといっても冷戦の終結が一番大事件でした。第二次大戦後の世界の流れを一変させるものでした。同じ頃にプラザ合意などで日本に対する風当たりが強くなりました。「狡兎死して走狗烹る」のたとえは第一次大戦後の日英同盟の例を見ても明らかですので、大抵の識者は状況の変化を読んでおります。それを表面に表わす程に単純ではありません。その次にバブルの発生とその崩壊です。バブルの崩壊の後には大不況と大震災があるというのは大正時代の教訓ですが、神様は意外と意地悪のようです。勢いが強い時には幽霊も引き込みますが、一旦、力が衰えるとあらゆる化け物が襲ってきます、しかし、苦難のときをしっかりと乗り切れば新しい体質ができあがるので、訓練には耐え切れればまた新しい展望が開かれるのが歴史の教訓です。

私自身のことを申し上げますと、大学を出たのが昭和23年3月で、それから旧制の大学院で中川富弥先生の指導の下で勉強していました。何しろ敗戦後の時代ですから大変でしたが、先生の示唆で中学や高校で社会科や英語の教師のアルバイトをしながら研究生活に入ってゆきました。今だに研究生活を続けることになるのですが、その成果については自分で威張る程のものはありません。昭和25年の1月に助手にして頂いて、明大から給料をもらえるようになりやっと生活が安定しました。昭和25年とは1950年ですので、本年の1995年まで45年に及んだことになります。本当に御世話になったと改めて御礼を申し上げます。それから昭和26年の秋から教え出して長い教師生活をして参りました。この間に世界は1960年代末でのブレトン・ウッズ体制下で経済成長は目覚しく、日本の成長も年率 GNP の成長が10%

## 謝 辞

を超えるという程でした。世界の人口も次第に増加してやがて近い中に60億になろうとしています。当然、良いことばかりではありませんが、世の中で良いことばかりが続くと考える方が間違いです。結核で死ぬ人が減少すれば、その関係の療養所は転換が必要です。青函トンネルができれば、ハンケ業も転業を迫られる。伝染病研究所を作ると言えば近所の人々に反対運動をうけるのは北里柴三郎先生以来の伝統です。経済学はこのようなことは先刻承知で、摩擦を少なくするのが重大な役目でしたが、今後も進歩とその代償については主要項目になるでしょう。第二次大戦後の経済学は個々に立派な業績をあげられた方々が相当いるのですが、結局、この方向で良いのだという方針は確立するに到っていません。マルクス経済学とケインズ経済学は両方共自由放任の経済学に対立するもので、社会主義計画経済か資本主義計画経済かの対立でした。戦後はじめの頃の対立はこのマルクスとケインズの深刻な対立でしたが、やがてフランスの共産党の政策が全くケインズ政策になるような状況になりました。計画経済に対する抑制もフリードマンやハイエクなどの研究成果からして、自然失業率とかフィリップス曲線の妥当性についての疑問とか、いろいろケインズ政策に対する問題点も出ています。不確実性の時代という言葉が流行した時代がありました。しかし進歩には不確実性が必然で、確実性のある進歩とは計画経済社会の可能性の喪失でわかるように、後進社会ではキャッチ・アップの段階としては有効でしょうが、最先端を進むものには適合しないでしょう。しかし、自由放任で良いかという点、ケインズ理論が出現したように市場の失敗とか不完全雇用均衡もありうるのです。したがって、ある時はケインズ派、ある時に自由放任派というような戦略的プラグマチズムが必要かと存じます。もっとも、その種の態度は全く非科学的であるという批判を受けることになるでしょう。このように、進歩の原動力としては自由競争を重視し、社会的安定には政府の介入を当然視するのでは、政

策屋のそしりを免れないことにはなりますが、いまだ、この線をとれば、経済的には安心だというような考えには到達していないことは申し上げざるをえません。現在の経済は良くも悪くもドルに原因があると考えています。アメリカが自由に発行しうる通貨が世界通貨である処に問題があるのです。過去に良かったことも将来に良いかは疑問です。

謝辞の中でこんなに勝手な話をして申しわけがありませんが、長い間の経験に免じてお許し下さい。教師生活の中でいろいろのことがありましたが、それを弁解することも誇示することもないと思います。これからは静かに落付いて読書を中心に勉強したいと思っておりますが、それも実現できるかどうかもわかりません。天命を知る境地になっているわけではなく、あい変わらず愚かしい自分流の仕方生きて死ぬより仕方ありません。

最後に改めて感謝すべきところに感謝を申上げる次第です。どうもありがとうございました。